「講義要綱」における
仮名本語と原語の綴りとの関係について

POPESCU FLORIN

一　はじめに

「講義要綱」と呼ばれるキリシタン資料は尾原悟氏が紹介された写本である。イエズス会日本年報によると、1593年に当時のイエズス会日本副管区長ペロ・ゴメス師によって編著され、1595年にイエズス会士ペロ・ラモン師によって和訳されたという。現在は、ヴァチカン図書館所蔵のラテン語版とオックスフォード大学図書館所蔵の日本語版が残っている。拙稿「「講義要綱」の成立について」[1]では、いずれも原本ではなく、書写であることを指摘した。筆跡を検討した結果、ラテン語版でもっとも分量の多い筆跡は日本人によるのではないかという結論に至った。

拙稿「「講義要綱」におけるローマ字書きの本語について」[2]（以下「ローマ字本語」と略称する）、「「講義要綱」における仮名書きの本語について」[3]（以下「仮名本語」と略称する）では、「本語」と呼ばれる、和文の中に出てくる外国語を考察してきた。「ローマ字本語」では、ローマ字書きの本語は大体ラテン語のもの（44.5%）とポルトガル語のもの(23.7%)があるが、ポルトガル語の形をしている語の中でも語末の二三文字以外ラテン語の語形であって、語末だけをポルトガル語風に換えられたものが多いことを指摘し、筆記者が本語をポルトガル語で表記する強い意図があったという結論に至った。

拙稿「仮名本語」では、本語の揺れのもととなった原因を三種類に分けた。それは、一つ目には誤写に基づくであろう誤字・脱字・衍字、二つには誤写ではない仮名表記の問題、三つ目には、もととする言語の相違である。上記の拙稿で最初の二種類を検討した結果、本語が表記されている形はローマ字の綴りをもとにしているのではなく、原語の発音の形をもととしているものであることが分かった。また、ラテン語から和訳を行ったヨーロッパ人グループと筆記作業を中心に行った日本人グループという仮の状況を考え、ヨーロッパ人グループはラモン師一人ではないかと考えた。そして仮名本語に原語のアクセントなど、発音の要素が入っていることから考察し、和訳作業はラモン師によってなされ、筆記作業には日本人

と共に、ヨーロッパ人宣教師が携わって、本語の発音を提供したのではないかと言う結論に至った。ただし、このヨーロッパ人はラモン師自身であったかどうかは分からない。

「仮名本語」で指摘したように、日本語版の中に出てくる仮名本語は、6割以上がポルトガル語、1割強（11.9%）がラテン語の形、15%程度がラテン語とポルトガル語と共通している形、残りはラテン語とポルトガル語にない形である。それらの語には、スペイン語に近い形がある。

日本語版のもとにあるのはラテン語版なのに、なぜ本語の大半ポルトガル語で書いてあるのだろう。本稿では、三番目の相違の原因となる、もととする言語の語形の中から、文法的な変化による相違を検討してゆく。

二　原語における文法的変化による相違

本語が和文中で機能している以上、それらには日本語の統語論的職能を示す助詞・助動詞などが付くようになっている。しかし、原語の文法規則による屈曲形の例も見られる。

和文中で本語を屈曲する必要性は原則的にないものの、屈曲した本語がラテン語の特徴を持ったり、ポルトガル語の特徴を持ったりするので、本語のもとの言葉を検討するに当たってそれらの特徴を考える必要がある。

なお、「仮名本語」で誤写や省略表記などによって語形が分からなくなっている単語は仮名本語の1%程度あるが、これらを検討から外すことにする。

二・1　名詞

「仮名本語」で指摘したように、仮名本語は2,201種類、延べ14,643語ある。その内に、名詞は926種類、延べ11,656例ある。ラテン語版の原文における格に対して、和文中における統語論上の機能は日本語の文法に準じて示されている。

例：余ノ悪人ヲシユイソヲ以テ糺明シ玉イテ此等ヲインヘルノニ墜シ玉シ事尤也（241オ）（本語には下線を付した）

マルチリヨハカリタアテノアクトノ内ニ頭上ノアクト也

三ニハヒイテスカレリシアンニ対シカ死スル事是也

ラテン語版における数も、日本語特有の複数標識によって示される場合がある。

「～達」4種類。例：ドトウル達（doutor　ポルトガル語（以下は「ポ」と省略する）、学匠）

「～衆」1種類。例：キリシタン衆

「～等」3種類。例：ハリセヲ等（fariseos　ポ、パリサイ族）

「諸ノ～」1種類。例：諸ノマルチレス（martires　ポ、殉教士）

反復形　3種類。例：テンホロ＼／（templo　ポ、寺）

つまり、ヨーロッパの諸言語において屈曲によって示す名詞の格は助詞、数は語句、または接尾語によって示されて、本語の名詞がもっとも一般的に取る形は原語における主格単数形である。

格と数が日本語特有の標識で示されている以上、本語は主格単数形で十分なはずであるが、実際複数形で出てくる言葉は多く、主格以外での形の語にも若干ある。

まず、複数形の様子を見る。書名に含まれるものを除くと、複数形を取っている名詞は71種類で598例（異なり語の名詞の内7.6%で、延べの内5.1%）あり、日本語式の複数形の例より遙かに多い。

日本語式の複数と原語式の複数を示す接尾語が同時に付いている語がいくつかある（たとえば、上の例の「諸ノマルチレス」）。日本語の複数形式と原語における複数形式の間にはっきりした使い分けはないようであるが、だいたい日本語式の複数形を取る語は、本書に限らず、1590年版「ドチリナキリシタン」、1591年版「サントスの御作業」、1593年版「ヒイデスの導師」など、他のキリシタン資料にも出現例数が多い。

数の標識は、ほとんどの場合に語尾-sとなっている。例外は、本語二つ以上によって構成される表現に入っている数例のみである。-sによる複数形はポルトガル語やスペイン語のすべての名詞と形容詞に共通するが、ラテン語では主格で複数形がsに終わる言葉は第三転尾のものだけである。つまり、-sによる複数形がラテン語では第一転尾と第二転尾の名詞のものである場合は、それらの名詞がポルトガル語として扱われていることになる。

例：セレモニアス（ラテン語（以下は「ラ」と省略する）　ceremoniæ、ポ cerimonias）

第一転尾名詞セレモニアスの場合、この語を-sが付いたラテン語と考えることもでき、またポルトガル語と考えることもできる。その場合、「仮名本語」[4]で指摘したiとeの混同が生じていることになる。どちらにしても、この語がポルトガル語として扱われていることになる。

しかし、実際には第三転尾の語が第一と第二転尾のものより多く、複数形の形で区別できない本語が残る。

例：ヒルツウテス（ラ virtutesか、ポ virtudesか）

このような複数形ではラテン語かポルトガル語か判断できない。

次に格の表示について考える。格の表示は、ラテン語では語尾変化によるのに対して、ポルトガル語やスペイン語では冠詞の形による。日本語版では、冠詞が出現することが全くないため、ポルトガル語に基づいた本語は実質主格の形しかとらない。

主格以外の形で出てくる本語はラテン語の異なり34語、延べ53例である。926語ある本語の名詞の内に異なり語数として5%にも至らない。しかし、100語ほどしかないラテン語の名詞の中では3割以上である。

主格以外の形を取っている34語（延べ53例）の内、10語（延べ15例）は単独で出てきて、24語（38例）が2語以上によって構成された表現の中に出てくる。

2語以上の表現の場合は、これらの語がとる格標識が原語における構文によって決められることはあろうが、単独で出てくる語は、主格以外の形をとっていることは原語の規則によるものではないことは確実である。これらを表１にあげる。

表１

番号	語	ラテン語	格	原形	（意味）	例数	場所
1	ハラミニス	flaminis	属	flamen	風、息	3	276v注
2	フルミニス	fluminis	属	flumen	流れる水	2	276v注
3	サンキニス	sanguinis	属	sanguis	血	3	276v注
4	インテンシヨウニス	intentionis	属	intentio	意向	1	315u
5	ハアチリス	patris	属	pater	父	1	271v引用
6	ケレアトウレン	creatorem	対	creator	作者	1	164o引用
7	コルヂス	cordis	属	cor	心	1	312v
8	セロルン	cælorum	属	cælum	天	1	184r
9	ハアテレン	patrem	対	pater	父	1	157v引用
10	メンチス	mentis	属	mens	理性	1	304v引用

名詞の全体の内、主格以外の形をとった語は表１にある単一語の表現の10語だけであるから、本語の表記される形が基本的に主格であることは明らかで、これらの10例は単なる例外に過ぎないだろう。そして、これらの10語に関しても、置かれている前後の文脈を見れば、

主格以外の形をとった理由が分かる。

まず、表１のいくつかの語は先行の別の本語を修飾している。

例：

(A) ハウチスモハ以上三ツアリ。フルミニス、ハラミニス、サンキニス、是也。フルミニストハ水ノハウチスモノ事也。ハラミニストハ授リタク思望ミノハウチスモ也。サンキニストハマルチルノ血ノハウチスモナリ。(バウチズモ（洗礼）は以上三つある。これらはフルミニス（水の）（洗礼）、ハラミニス（風の）（洗礼）、サンキニス（血の）（洗礼）である。）(276ウの上部にある注)。

(B) アモルノクワンチタアテト云テ分量ハ二サマニアリ。一ツハインテンシヨウニストト云テ、心中ヨリ深ク御大切ニ存シ奉ルコト。二ニハ、Apreciationisト云テ、深クDsヲ重ジ無二無三ニ思イ奉ル大切ナリ。(アモル（amor　ラ・ポ共通、愛情）のクワンチタアテ（quantidade　ポ、量）と言う分量は二種類ある。一つは、インテンシヨウニス（意向の）（分量）と言って、心中より深く大切に存じ奉ること、もう一つは、appreciationis（評価の）（分量）と言って、Ds(デウス)を深く重んじ無二無三として思う愛情である。)(315ウ)

(A)では、仮名表記のフルミニス、ハラミニス、サンキニスはその前にあるハウチスモを修飾しており、それに見合った属格をとっているのだろう。単独で出てくる形もなぜか属格となっている。

(B)では、仮名表記のインテンシヨウニス、そしてローマ字表記のApreciationis（正しくはappreciationis）は直前に出てくるクワンチタアテを修飾しているのである。ラテン語版にも該当個所に同じ修飾関係が見られ、なぜかこれらの2語は格表示をラテン語版のままに掲載されたようである。

しかし、先行する語を修飾する語または表現が羅列される例は他にもたくさんあるが、仮名本語が属格を取るのはこれらの例だけである。

(C) Dsヲ敬イ奉ニ三ノアクト篭ルト心得ヨ。一ニハ（中略）分別ノアクトナリ。二ニハ（中略）ヲンタアテノアクト也。三ツニハ辞ヲ以テナリトモ、外ノ様ヲ以テナリトモ（中略）敬イヲ顕ス事也。

この文の場合にも、ラテン語版の該当個所を見ると、「分別ノアクト」はactus　ipsius intellectus（理性そのものの行為)、「ヲンタアテノアクト」はactus　voluntatis（意志の行為)、actus　exteriorとなっている。一つ目intellectusに対しては適切な訳語と思われた「分別」があ

って日本語で表される。二つ目voluntas,-tisに対しては多用されるポルトガル語のヲンタアテが使われるが、冠詞がないため必然的に原語の格表示がなくなっている。そして三つ目のexterior（ラ・ポ共通、そとの）に対する訳語がおそらく「外の」であるが、これだけでは「上辺の」というニュアンスが充分顕著でなかったためか、説明の文が加えられている。

(A)、(B)の例文において、属格の形を取っている語は先行する本語を修飾しているだけでなく、これらの語が珍しくてポルトガル語でも日本語でも一対一の訳がなかったことが、そのまま使用される原因なのである。これらの語が珍しいのは、出現してから、日本語の説明がついているところからも分かる。

単一語で、主格以外の表現が出てくるもう一つの場合は、これらの語が文の中にもつ機能性が低く、引用に近い状態で用いられる場面である。

(D) 一番ノアルチイコノハアテレント云三番メ（の）辞ノ釈事（第一ヶ条のpatremという三番目の言葉の釈のこと）

本文のこの辺りでは、カトリックの祈祷文Credoの細かな解釈で、「一番ノアルチイコ」とはその第一文である。148オにこの祈祷文がラテン語で完全に掲載されているので、この第一文を以下にあげる。

(E) Credo in vnum Deum, palrem (patrem) omnipotentem, creatore' cæli, et terra'(terræ)（天地の御作者、全能の父、神様一人を信じる。() には正しい綴りを入れた）

この第一ヶ条にあるそれぞれの単語について細かく解説する章がある。palremはハアテレンと表記され157ウに、creatore'はケレアトウレンと表記され164rに、それぞれ章の題名として再び出現し、(E)でとっている対格の形をそのまま仮名で再掲されている。つまり、(E)にある語が仮名表記で引用されている訳である。表１の第8項目セロルンも同じような文脈で出てくる。

表１の残りの2語（メンチス、コルヂス）に関しては、修飾するところと、引用に近いところとを兼ねている。

（F）【空白】ト云テ、アニマノアヒト也。メンチストハ即アニマノ心也。

この部分はアヒト（習慣）がヒルツス（道徳）の一つのあり方であることについて述べるもので、ラテン語版と比較すると、mentisは節の題名habitus mentis（理性の習慣)に入っている。したがって、日本語版においても、空白となっている箇所にローマ字のmentisが入るはずであるが、直後に出てくる仮名表記のメンチスは、アヒトを修飾すると共に、【空白】に入るはずだったmentisの発音を表す。

つまり、以上の10語が主格以外の格を取っているのは、先行する語を修飾することが一つの原因であるが、それだけではない。難語であるか、もしくは一旦前にローマ字で出た形をそのまま仮名表記にしている点がもう一つの要因であろう。

2語以上で構成される表現に出てくる残りの24語（延べ38例）は前置詞の付く名詞と、名詞が中心となっている表現で、名詞が取っている格は本語の表現の文法的な関係が要求するものと一致している。なお、ラテン語cælumと paterは以上の、単独で出てくる例とともに、2語以上の表現の中にも出てくる。

(G) ラウステイ（laus Dei（神様の誉れ）, laus（誉れ）、Dei < Deusの属格形）

(H) ヘルチスツルクシヤウネスマテリエ（68才注、per destructiones materiæ（材料の破壊によって）、per（～によって）は対格を要求する前置詞で、destructiones < destructio（破壊）の対格形、materiæ < materia（材料）の属格形）

(I) インヲ゛ウト(in voto（意思表示に）、inは奪格を要求する前置詞で、voto < votumの奪格)

これらの表現は前置詞の付いた名詞と、名詞を中心とした（前置詞以外の）句とに大別できる。名詞を中心にした句は、書名のActa Apostolorumを除くと、殆どが出現例一つだけである。上の単独語の場合と同様、これらの表現は難語を含んだものか、一旦ローマ字で出てきた語の発音を仮名表記したものである。しかし、例外として、前置詞のついた名詞からなる表現ではヲト（例(I)）がある。この語は単独形ヲトとしてポルトガル語としても頻出している。

つまり、表現の構文が分かりにくい二語以上の表現はラテン語で表され、かつもとの構文をそのままに保って出てきている。単一語で出てくる語は、(A),(B)に出てくるバウチスモ、アモルのように修飾される語が比較的頻用されることもあって、ポルトガル語で出ているが、難語のほうはラテン語のまま、しかも格を保存したままで出てくる。そして、両方の言葉が比較的頻用される場合、また適切な日本語訳がある場合は、それらはポルトガル語で、もしくは日本語で出てくる。

この現象から分かることが何点かある。

1. 難解な構文はそのままラテン語で記される。
2. 構文が分かるが、表現を構成するどちらかの語が難語ならこれをラテン語で、簡単な方をポルトガル語、あるいは日本語にする。

3. 適切な訳があるとき、ラテン語を使わない。

という三つの段階があるようである。

つまり、難易度としては、ポルトガル語は日本語とラテン語の間としてとらえられていたことが分かる。

二・2　形容詞

形容詞に関しては、修飾する名詞が日本語である場合の一部にのみ、「ノ」または「ナル」を取って後続の名詞と繋ぐ場合もあるが、助詞を介さずに並べる場合がもっとも多い。

例：アシテンタル$\boxed{ノ}$喜

スヒリツアル$\boxed{ノ}$体

シユストナル根元

ナツラル精力

ヲリシナル科

形容詞が修飾する名詞が同じく本語である場合、助詞は介されない。

例：ベゼタチイワ・アニマ（vegetativa anima　ラ、身体の基本機能を担当する魂）

ウニヘルサル・シユイゾ(universal juizo　ポ、全員の審判)

また、日本語で形容詞は、修飾する名詞に先行することになっているが、形容詞も名詞も本語である場合には、そうとは限らない。

例：カロルナツラル（calor natural　ラ・ポ共通、自然にもつ熱）1例

ハライソテレアル（paraiso tereal　ラ・ポ共通、地上の天国) 11例

つまり、形容詞と、それが修飾する名詞の両方が本語であるときは、2語が日本語の文章として並べられているのではなく、それらによって作られた表現が、順番が後置修飾・前置修飾のどちらでもありえる原語のものとして記されていることが分かる。

仮名表記の形容詞は異なり語214、延べ2,202例ある。原語において、形容詞は格、文法的性と数によって屈曲するが、日本語版に出てくる屈曲形はラテン語の4語（延べ11例）以外、性と数のみが表示されて、格を表示することがない。その形は、修飾する名詞の性・数によって決まる。この調和は、形容詞が修飾される名詞と接近している時はもとより、離れている時にも見られる特徴である。

例：スキスマチコ・サセルタウテ（schismatico　sacerdote　ポ、宗派分立の教会役人、形

容詞は男性名詞sacerdoteに見合った男性の形をとっている）

アツツス・ヒリムス・ススタンシアリス（actus primus substantialis　ラ、第一の物質的行為、形容詞primus　とsubstantialisは男性名詞actusに見合った形をとっている）

スカンタロハ二様ニアリト心得ヨ。一ニハハシヲ゜ト云フ也。(327ウ。pasivo（ポ、無作為の）は先行する男性名詞scandalo（ポ、騒動）に見合った形をとっている）

男性・女性の区別がある形容詞は120種類で、出現例は女性が458、男性が351あるが、形容詞が修飾する名詞と調和していない例は7例である。また、すべての形容詞が数によって変化するが、数の不調和はまた7例だけである。つまり、男女の例を合わせた809例の内に、不調和の例が1.6%ほどで、調和が固く守られていることが分かる。

名詞、形容詞など、本語の二語以上からなる表現の特徴をここでまとめる。

(1) 助詞が間に入らない場合が多い。

(2) 日本語においては形容詞が名詞に先行することになっているが、本語の順番はそうと限らない。

(3) 日本語では、形容詞と名詞の間に性・数などの調和の必要はないが、実際は殆どの場合に調和がなされている。

つまり、本語による形容詞と名詞からなる表現の場合、構文は原語に準じている訳である。

二・3　副詞

副詞は助詞を添付されずにそのまま使用される。これは、比較的に多用されるいくつかのラテン語副詞が「-te」に終わり、「かまへて」、「あへて」など、日本語の副詞と似ていることと関係があるかもしれない。

例：三ヶ条ヲハエスヒリシテ信セシ、相残リヲハインヒリシテ信セラレシト云フ差別マテ也。（三つの条は明らかなものとして信じ、その残りは含蓄的に信じていたという差別まで）（80オ）

経文ヲエスヒリシテ信スルト云フ也（宗教書を明らかなものとして信じるということである）（80オ）

二番目の例では、エスヒリシテの最後の二字は略字「メ」となっており、おそらく筆記者はどこまで本語、どこから副詞につくべき日本語の接辞としての「シテ」か混乱していたの

であろう。

動詞の直前に先行する場合は、本語の副詞が動詞を修飾することは比較的分かりやすい。しかし、ラテン語版で動詞が目的語を取る場合、日本語版では、目的語の方が動詞の直前に置かれ、副詞は動詞と目的語によって作られた動詞句の前に置かれることが多い。結果として、副詞が名詞に先行することが多い。そして、副詞が助詞などで副詞であることを示されていないため、原語の知識がなければ事実上形容詞と区別がつかないことが多い。特に、後続の名詞が本語である時に分かりにくい。

例：(1) 佛又インヘルヘイテ此マタメントヲ保ツ事ハDsノカラサヲ以テ世界ニテ安キ事也。(292オ：インヘルヘイテ ラ(?)、不完全に。マタメント ポ、戒律。カラサ ポ、慈悲。仏教ではこの戒律が不完全にしか守れないことだが、デウスの慈悲によって全世界で（守るのが）容易なことである。)

(2) 神等ヲ拝ム事ハホルマリテル、バラスヘミヤヲナスト分別セヨ。(312ウ)（佛神を拝む事は、形式の上で異端を犯すと分別せよ）

(3) ホルマリテル、スカンタロト云テ…（328ウ）（形式上では、騒ぎと言って）

formaliter （ラ、形式上）はラテン語の副詞であることを考慮に入れ、ラテン語版で該当する文と比較すると、上の文においてこれが動詞にかかっていることが分かるが、ラテン語を知らない日本語版の読者には、ホルマリテル・バラスヘミヤ、そしてホルマリテル・スカンタロと、後続の名詞を修飾している形容詞として誤解しやすい。

formaliter、 naturaliter、 simpliciter など-terに終わる副詞は、ラテン語を知らない読者は後続する名詞にかかる形容詞として混乱する恐れがあったとしても、同じ形の言葉はポルトガル語などにないので、少なくとも元にある原語はラテン語と断定できる。しかし、本節の初めに紹介した-eに終わる副詞に関しては、原語すら判断しにくい場合がある。

例：(4) 是ヲ以テ○×ノエスヒリシテ{タ}ヒイテス肝要也ト云事明也。(86ウ、{} は挿入された文字。○×は「キリシト」を意味する合字である)

(5) 至極ノネセシタアテ（ノ）時、ヒリワテ、ハウチスモヲ授クル事ハモルタル科ニアラザル也。(276オ)

(4) の例では、語尾が形容詞の「タ」に訂正されている。expliciteは仮名表記で35回出現するが、これは「エスヒリシテ」が出現する九例目で、その内で本語の名詞に先行する三番目の例である。例(4) の前にある2例からの類推で、筆記作業グループはもはやこれを、名詞を修飾する形容詞と見なしていただろうと推定できる。

実際ポルトガル語で-eに終わる形容詞もあるため、副詞を形容詞と混乱するこのような誤解はさらに招きやすかっただろう。

例：(6) 此ミリタンテノ恵化――ハチリンハンテニ続クト云ヘリ。(111ウ)（恵化――はエケレジア（教会）の漢字表記）

(7) フルテンテナル数多ノ老体ノ内ニ居ルヘシト云ウ語也。(336オ)

ポルトガル語の形容詞があって、そして副詞が名詞に先行する場合があるから、筆記作業グループは(2)~(5)の例の副詞をも形容詞と見なしたであろう。元の言語を判断するために、これらと同じ環境にある語を全部とりあげてみた。

表２

番号	仮名表記	ラテン語の綴り	ポルトガル語に該当する：	
			副詞	形容詞
1	エスヒリシテ	explicite	explicitamente	explicito
2	インヘルヘイテ	imperfeite	imperfeitamente	imperfeito
3	インヒリシテ	implicite	implicitamente	implicito
4	インチレキテ	indirecte	indiretamente	indireto
5	スンメ	summe	summamente	summo
6	シユリチセ	juridice	なし	juridico
7	ヒリワアテ	private	なし	privado
8	インチヘレンテ	indifferente	なし	indiferente
9	イノセンテ	inocente	なし	inocente
10	インスタンテ	instante	なし	instante
11	インテンシヘ	intensive	なし	intensive
12	ミリタンテ	militante	なし	militante
13	ヲニホテンテ	omnipotente	なし	onipotente
14	フルテンテ	prudente	なし	prudente
15	サヒエンテ	sapiente	なし	sapiente

表２では、日本語版においてエ列に終わる全てのラテン語副詞と形容詞の本語をあげた。これらの語は全て、名詞に先行する場合がある。

表２のポルトガル語の形容詞にはeに終わるものとoに終わるものがある。

ポルトガル語の欄に入っている語をラテン語の形態論から分析すると、eに終わる形容詞はラテン語の第二転尾のものを元にしており、oに終わるものは第一転尾の形容詞を元にし

ている。oに終わるものに関しては、派生する副詞は女性形に接尾辞「-mente」（たとえば、本文に出てくるソレンネメンテ(solenemente　ポ、荘厳に)）が付くようになっているので、ラテン語の知識がある者なら、誤解する恐れがない。つまり、8~15の例は、後続する名詞に下接するポルトガル語の形容詞で、1~7の例は、ラテン語の副詞である。この二種類の品詞の間に混乱の余地が出てきたのは、両種類とも語尾が同じであり、名詞の前におかれ、さらにどれがポルトガル語で、どれがラテン語が分からない知識不足のためである。句読点のないところが混乱をさらに生じやすくした。

二・4　動詞

仮名表記の動詞は14語で延べ数125例ある。

表３　仮名表記の動詞

番号	語形	例数	ローマ字	文法的部類	該当する原語
1	ケレイト	55	credo	直説法	ラテン語
2	ケレテレ	2	credere	不定法	ラテン語
3	エセ	1	esse	不定法	ラテン語
4	インテリゼンヂ	1	intelligendi	動名詞	ラテン語
5	アベンチス	1	habentis	現在分詞	ラテン語
7	アシテンス	2	accidens	現在分詞	ラテン語
8	エンス	6	ens	現在分詞	ラテン語
9	アシエラル	6	adjurar	不定法	ポルトガル語
10	カスチカル	2	castigar	不定法	ポルトガル語
11	コンサカラル	1	consacrar	不定法	ポルトガル語
12	ケレアル	3	crear	不定法	ポルトガル語
13	セラル	11	gerar	不定法	ポルトガル語
14	セネラル	12	generar	不定法	スペイン語
15	インテルヘレタル	1	interpretar	不定法	ポルトガル語
16	シユラル	1	jurar	不定法	ポルトガル語
17	ヘルミチル	9	permitir	不定法	ポルトガル語
18	スカンタリゼル	1	scandalizer	不定法	ポルトガル語
19	テンタル	10	tentar	不定法	ポルトガル語

まず、ラテン語の形を見る。55例出てくる、唯一の述語的法のcredo（接続法、現在、一人称単数）は、祈祷名を指している例が圧倒的に多く、和文で動詞として機能している例はない。

同じ動詞の不定法「credere」もあるが、出てくる二例とも、81ウにある第十二章の題名「ヒイテスノ一番ノアクトハ、ケレテレト云テ信スルコトト云フ事」と、二行後にある、ほぼ同じ形の本文である。しかし、これらの例のケレテレは述語ではない。

もう一つのラテン語の不定法「エセ」は前後に全く説明なしに54オの一カ所だけに出てくる。

> Dsヨリアニマラシヨナルヲ色身ニ托シ玉フ事、只其アニマノエセヲ以テ色身ニ命ヲ与へ、諸ノ所作ノ根本トナルヘキ為也。

確かに、「エセ」は機能しているが、動詞としてではなくて、抽象名詞としてである。

つまり、ラテン語をもとにしていると思われる、表３の1~3の本語は述語として用いられることがない。

残りのラテン語に基づいた形では、動名詞と分詞がある。ロマンス語の進化の早い時期から、ポルトガル語やスペイン語に動詞の活用形として残っているのは、ラテン語の動名詞では形容詞的に使用される形(gerundio)と、ラテン語の分詞では過去分詞だけである。

ラテン語にあった動名詞の数種類から、ポルトガル語やスペイン語には、ラテン語文法で主格形の動名詞と呼ばれる形しか残っていない。しかし、属格形動名詞に当たる表３の第二項目「intelligendi」のような形は残っていない。

分詞では、ラテン語にあった現在分詞と呼ばれる形がロマンス語に入ったのは一部の場合のみである。その場合でも、この形は科学的・哲学的な借用語として受け入れられ、元の動詞とは異なった用い方をされ、また異なった音韻変化を受けているので、自立した名詞となっている。たとえば、表３の「ens」(esseの分詞・存在するもの）からポルトガル語化したenteは、ポルトガル語の存在動詞「ser」との類似性を失って無関係となっている。ラテン語accidere（「落ちる」、または「起こる」）はポルトガル語では古語のcairを経て、一六世紀にはすでに現代語のquedar（落ちる）となっているが、その分詞accidensは（本書にヘル・アシテンスper accidens（偶然的）の前置詞構造で使われる）ポルトガル語ではacidenteとなり、「事故、出来事」という意味になった。

これらの例は、あくまでもポルトガル語に対応する語形が存在する限られた場合で、ラテン語のすべての動詞に対してこのようなポルトガル語があるわけではない。たとえば、表３

の第5項目「アベンチス」に対応するポルトガル語はない。

表3の4~8の項目は例数も少なく、出現する例のほとんどが2語以上の表現なので、これらの形がラテン語のままで使われたのは、語形が比較的珍しく、簡単に分析することができなかったからであろう。

表３の9~19の項目は、ポルトガル語・スペイン語を元とする語で、和文において述語として用いられる。「～スル」の形を取る。

例：去ハ、Dsヨリ何事ヲケレアルシ玉フソト…(164ウ)

マタメントヲ省ク者ハ天狗ヲ敬フ者也。又Dsヲテンタルスル者也。　(294オ)

つまり、本語の動詞が和文で述語として用いられるとき、ポルトガル語（あるいはスペイン語）の不定法に基づいた形に「～スル」の形をとるようになっている。

原語の形について考えてみる。ほとんどの例がポルトガル語に該当するが、ポルトガル語には存在しないgenerarはスペイン語にある。実際に、ポルトガル語に存在する表３の不定法は、ポルトガル語特有であるgerarを除くとすべてがスペイン語の語形とも、語尾以外はラテン語の語形とも共通している。

例：interpretar （ポ） < interpretare （ラ）

tentar （ポ） < tentare （ラ）

generar （ポ）< generare （ラ）

つまり、gerarを除くと、表３の仮名表記の形では、ラテン語の形がポルトガル語の形と相違するのは末尾の「レ」がポルトガル語において「ル」になっているところだけである。語形が全部スペイン語にあるわけであるが、仮名本語全体ではスペイン語にしか存在しない形が数例のみであることから、これらの形は、意図的にスペイン語にされていると考えるべきではないだろう。むしろラテン語にあった形をポルトガル風に変えようという全体の方針の中、筆記グループが迷いながら語形を決めた結果、スペイン語に一致する形になったと考えるのが適当である。ラテン語generareに当たるセラル、セネラルの全23例の内に、「ネ」を行間に足したり、一旦筆記したのを削ったりする数例が存在していることが、この事態を窺わせる。

三　おわりに

ここまで、本語を品詞別で見てきた結果、いくつかの特徴が分かった。

イ．本語を和文になるべく違和感なく挿入するための創意工夫が施されている。そのために、限られた場合を例外として、本語は原形とでもいえる、もっとも簡単な形をとって、それに日本語特有の助詞・助動詞がつく。名詞は主格形＋格助詞（もしくは無標識）、形容詞は主格形＋「ノ」、「ナル」（名詞に先行する場合は無標識）、動詞は不定法＋「スル」、副詞はまれに「シテ」が付くが、通常は無標識の形で用いられている。

ロ．原語の文法的な要素も多く伺える。2語以上による構造では語形は原語の構文による。日本語は数に対する規則が緩いが、ポルトガル語式の複数形をとっている本語が多い。形容詞が名詞を修飾する表現では、名詞が先行する場合が多い。文法的性によって変化する形容詞では、原語の名詞を修飾する時、調和した形をとっている場合が多い。

ハ．ラテン語をもとにしている本語は、格、性、数（動詞は法）など、原語の特徴をもっとも多く持っているといえる。これらの本語は、原語において珍しい言葉である点、ポルトガル語には訳しにくい点、そして日本語版においても例数の少ない点を共通にしている。多くの場合、表現は一度だけ出現して、その意味が日本語で説明される。

ラテン語の仮名本語がもつもう一つの特徴は、出現箇所が日本語版の第二編「アニマノ上ニ付テ」(2)と第二編B「アニマラシヨナルノ正体ハ不滅ナリト云証事」(2B)、また全書に散在している頭注に比較的頻出していることである。日本語版がラテン語版を翻訳したものであることを考慮に入れると、日本語版に見られるラテン語の形はより原典に近い形で残ったもの、つまり手を余分に加えられなかったものと考えられる。特に、注には、ラテン語文やローマ字の日本語文があり、本書を筆記した者が日本人であったとしても、ラテン語文をより厳密に写したものであることは明らかである。この状況から、2と2Bの筆記作業にはラテン語の形をより厳守しようとしたヨーロッパ人が関わったのではないかと考えられる。逆に、ラテン語が少なく、数箇所の例外を除くとポルトガル語、もしくはポルトガル語風に換えられている残りの部分は、ラテン語をあまり重視しなかったヨーロッパ人の監視下で筆記されたのではないかと考えられる。

今後は、「講義要綱」における本語の事態を明らかにしつつ、ヨーロッパ人宣教師と日本

人信者のコミュニケーションに用いられた言葉の特徴を考察してゆく予定である。

参考文献

Alvarez, Emmanuel "De Institutione Grammatica", Ioannes Barrerius, Olyssippone, 1572.

Buarque Da Holanda Ferreira, Aurelio: "Dicionario Aurelio", Editora Nova Fronteira, Rio de Janeiro, 1975.

Figueiredo, Candido de ~ "Grande Dicionario", Lisboa, 1947.

Figueiredo, Candido de ~ "Novo Dicionario", Livraria Bertrand, Lisboa, 1939.

上智大学キリシタン文庫編「Compendium Catholicæ Veritatis 解説——Commentaries」大空社、東京、1997.

尾原悟編著「イエズス会日本コレジヨの講義要綱」三巻、『キリシタン研究第34～35輯』教文館、東京、1998－1999.

尾原悟編著『Compendium Catholicæ Veritatis』大空社、東京、1997.

尾原悟編著『イエズス会日本コレジヨの講義要綱』大空社、東京、1997.

〈注〉

(1) 「「講義要綱」の成立について」、国語国文、第七十一巻第十号.

(2) 「「講義要綱」におけるローマ字書きの本語について」、國文學論叢、第9号.

(3) 「「講義要綱」における仮名書きの本語について」、国語国文第七十二巻、第六号.

(4) 注3に同じ、p.7.

(ポペスク フロリン・研修員)